

緒 言

土屋弘行

Hiroyuki TSUCHIYA

金沢大学大学院
整形外科科学講座

年間出生件数が100万人を下回るわが国において、新たにがんと診断される患者は年間100万人を超えている、今や日本人の2人に1人ががんとなり、3人に1人ががんで死亡している現状を考えれば、言い古された言葉ではあるが、やはりがんは国民病の最たるものであるといっても過言ではないだろう。そのような現状の中で、抗体薬を代表とする多くの新規治療が導入され、がんの治療も大きく進歩が続けている。以前は長期予後が見込めなかったような症例でも、骨転移と共存しながら日常生活を送れるケースが増えている。

「転移性骨腫瘍(がんの骨への転移)」といってもその実態は様々であり、一括りにしてしまうことは甚だナンセンスである。これは骨が折れたことを「骨折」と一言で片付けてしまうのと同様なことでもある。骨を専門としている整形外科医であれば、いかに腫瘍を専門とはしていなくとも、基本的な知識を有していることは非常に重要と考える。

本シンポジウムでは、この分野のエキスパートの先生方に各腫瘍によって引き起こされる骨病変に対する最新治療戦略について、わかりやすく解説していただいた。金沢大学の樋口貴史先生には、「腎癌の骨軟部転移に対する転移巣切除術」と題して、長期予後が見込める腎癌での骨転移巣切除の意義について述べていただき、九州大学の遠藤誠先生には、血液性悪性腫瘍ではあるが整形外科医が最初に診察を行う機会も多い「骨髄腫・リンパ腫における骨病変」について、整形外科医として最低限知っておくべき知識とその果たすべき役割について述べていただいた。帝京大学の河野博隆先生に、「肺癌の骨転移に対する治療戦略」を解説していただいた。静岡がんセンターの片桐浩久先生には、女性の罹患数1位である「乳癌」について、薬物療法から手術方法に至るまで幅広い解説を、順天堂大学の高木辰哉先生には、男性の代表的癌であり、骨転移を有していても長期予後が見込める前立腺癌について「前立腺癌骨転移の診療戦略」と題して解説をいただいた。そして、東京医療センターの森岡秀夫先生には、組織型で予後や治療方針が大きく異なる甲状腺癌について「甲状腺癌骨転移の治療」と題して解説していただいた。

日本整形外科学会では、がん患者で見過ごされてきた運動機能維持の重要性を考慮し、がん患者のQOLあるいはADL低下を最期まで可能な限り防ぐための新たな取り組みを「がんロコモ」として開始している。本特集が、諸先生方に日常診療を改めて見直していただき、運動器の専門家としてがん患者のQOLの維持に大きな役割を果たしていただく一助となれば幸甚である。